

川端龍子

《新樹の曲》

川端龍子(1885-1966)
《新樹の曲》

1932年
絹本彩色・屏風(六曲一双)
各181.0×399.6cm
平成25年度 川端捷良氏遺贈

©Minami Kawabata &
Ryuta Kawabata 2015 /JAA1500012

こ

の作品を遠くから眺めると、デザイン的、あるいは装飾的な趣向が際立って感じられることと思います。なぜなら、剪定された庭木はかっちりとした幾何学的に整えられ、色は鮮明、描写は平面的で陰影もなく、さらには背景に金まで散らしてあるのですから。けれども発表当時、この作品の本質的な魅力を、それとは別のところに見てとつた人物がいました。その人物とは鏑木清方。慧眼の批評家でもあるこの日本画家は、本作品を展評にとりあげた際、次のように記しました。

「新樹の茹込みたる形式美は、川端氏ならずとも材となし得たであらう。柔軟な嫩葉を、真黒な直線に劃つたのに至つては、氏ならずして何人も為し得ざるところ、鬼才の名を擅にする所以である。いはゆる新樹の曲に至りては、彼を眺め、これを仰いで、一々興味ふかく、それぞれの樹振り、葉形、作者の感興をそのまゝ、観る者に伝えずにはおかない」(『青龍展を観て』)

『鏑木清方文集 七 画壇時事』白鳳社、一九八〇年、所収。

《新樹の曲》の「新樹」とは新緑の樹木という意味。その言葉のとおり、楨、栢植など常緑の葉のところどころに、春に芽吹いた黄色やオレンジ色の若葉が混ざっています。清方はその若葉と黒い板塀との対比の妙に、この作品のすこさを見ているのです。

どういうことなのでしょう？ 清方の言葉の意味を理解するためには、数歩作品に近寄る必要があるようです。すると、この作品の細部が意外なほどに「写実」的であることに気付かされます。「写実」といっても克明細密な表現とはちがって、枝葉のかたちを的確につかみ、生き生きとした筆致で可能な限り再現的に描くもの。龍子の筆技は当館蔵の《草炎》(一九三〇年)にも見られるとおり見事なものでしたが、ここではその冴えた筆技が、若葉のやわらかさや伸びやかさ、樹々の生氣までをも巧みに写し出しています。

清方が注目したのは、要するに自然と人工の鮮やかな対比だったと言えそうです。若葉のやわらかいかたちと直線的な板塀。生命ある樹木と人工物。斬新な人工的形態に整えられた庭木に生氣が宿る描写も、この対比を一層鮮明に印象付けているようです。

モチーフは甲州街道沿いの羽村、調布附近で見かけた庭や板塀。ちょうど三男の嵩が東京高等造園学校を卒業して造園の仕事についたばかりだったので、龍子はその記念の意味を作品に込めたといえます。作品を贈られた嵩はその後出征し、一九四四年十一月にニューギニアで戦病死しました。以降、川端家で大切に受け継がれてきた作品です。

(美術課主任研究員 鶴見香織)